

## 実質化された人・農地プラン

注：本様式は参考ですので、地域の話合いの結果に応じて、積極的に記載する項目を追加してください。

市町村名	対象地区名（地区内集落名）	作成年月日	直近の更新年月日
波佐見町	鬼木地区	令和2年3月25日	平成31年3月27日

## 1 対象地区の現状

①地区内の耕地面積	41.6ha
②アンケート調査等に回答した地区内の農地所有者又は耕作者の耕作面積の合計	21.6ha
③地区内における75才以上の農業者の耕作面積の合計	4.1ha
i うち後継者未定の農業者の耕作面積の合計	1.6ha
ii うち後継者について不明の農業者の耕作面積の合計	0ha
④地区内において今後中心経営体が引き受ける意向のある耕作面積の合計	0.6ha
（備考） 昭和59・62年度 圃場整備 7.13ha 農地中間管理事業による集積 21.3ha（R1.11.30末）	

注1：③の「〇才以上」には、地域の実情に応じて、5～10年後の農地利用を議論する上で適切な年齢を記載します。

注2：④の面積は、下記の「（参考）中心経営体」の「今後の農地の引受けの意向」欄の「経営面積」の合計から「現状」欄の「経営面積」の合計を差し引いた面積を記載します。

注3：アンケート等により、農地中間管理機構の活用や基盤整備の実施、作物生産や鳥獣被害防止対策、災害対策等に関する意向を把握した場合には、備考欄に地区の現状に関するデータとして記載してください。

注4：プランには、話合いに活用した地図を添付してください。

## 2 対象地区の課題

75以上で後継者未定の耕作地が1.6haある。今後、耕作条件が厳しい中山間地域であるため後継者不在農地が増加していく可能性があるが、今地区での中心となる経営体は1経営体と周辺の農家でカバーしていくが、新たな農地の受け手の確保が必要。

注：「課題」欄には、「現状」を基に話合いを通じて提示された課題を記載してください。

## 3 対象地区内における中心経営体への農地の集約化に関する方針

鬼木地区の農地利用は、中心経営体である認定農業者1経営体が担うほか、機械の共同利用など集落営農組織を検討することで、地域で農地を守っていくことを基本とする。

注1：中心経営体への農地の集約化に関する将来方針は、対象地区を原則として集落ごとに細分化して作成することを想定していますが、その「集落」の範囲は、地域の実情に応じて柔軟に設定してください。

注2：「中心経営体」には、認定農業者、認定新規就農者、経営所得安定対策の対象となる法人化や農地の利用集積を行うことが確実と市町村が判断する集落営農及び市町村の基本構想に示す目標とする所得水準を達成している経営体等が位置付けられます。

(参考) 中心経営体

属性	農業者 (氏名・名称)	現状		今後の農地の引受けの意向		
		経営作目	経営面積	経営作目	経営面積	農業を営む範囲
			ha		ha	
			ha		ha	
			ha		ha	
			ha		ha	
			ha		ha	
			ha		ha	
			ha		ha	
			ha		ha	
			ha		ha	
			ha		ha	
			ha		ha	
計	1人		ha		ha	

注1：「属性」欄には、個人の認定農業者は「認農」、法人の認定農業者は「認農法」、認定新規就農者は「認就」、法人化や農地集積を行うことが確実であると市町村が判断する集落営農は「集」、基本構想水準到達者は「到達」と記載します。

注2：「今後の農地の引受けの意向」欄については、現状からおおむね5年から10年後の意向を記載します。

注3：「経営面積」欄には、プランの対象地区内における中心経営体の経営面積を記載します。

4 3の方針を実現するために必要な取組に関する方針（任意記載事項）

○ 農地中間管理機構の活用方針

農地所有者は、出し手・受け手にかかわらず、原則として、農地を機構に貸し付けていく。  
中心経営体が病気や怪我等の事情で営農の継続が困難になった場合には、農地バンクの機能を活用し、農地の一時保全管理や新たな受け手への付け替えを進めることができるよう、機構を通じて中心経営体への貸付けを進めていく。

○ 鳥獣被害防止対策の取組方針

鳥獣害対策として、こまめに侵入防止柵の点検を行い、補修を確実に行うとともに、捕獲隊の組織化も検討する。また、中山間地域等直接制度や多面的機能支払制度を活用し、地域での草刈りに取り組む。

○ 担い手確保の取組方針

耕作条件不利地では、新たな中心経営体の確保は難しく、地域で営農を継続することを目的とした集落営農組織を検討していく。また、U・Iターン等による定住者の就農に向けて受け入れ体制を整える。

○ 新規作物の導入方針

水田管理が難しい圃場に、収益性の高い果樹などの園芸作物の生産に取り組む。

○ 「鬼木棚田」景観維持等の取り組み

日本の棚田百選の認定を受けた景勝地として、「鬼木棚田」のネームバリューを生かした棚田米のブランド化を検討する。また鬼木加工センターの収益向上につながる農産加工品の充実を図る。

○ スマート農業導入の取り組み

草刈りや肥培管理など農作業の省力化・効率化のため、ドローンなどのICTを活用した農業機械の導入を検討する。